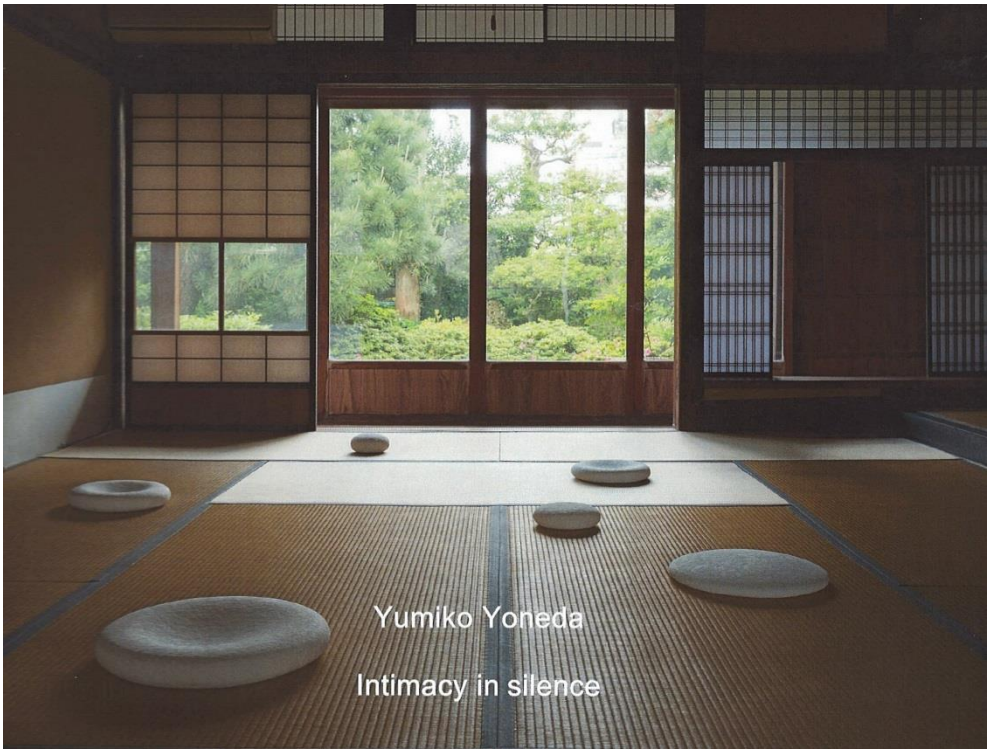
添付資料３

現代アートと伝統的日本家屋



Design and production　Yumiko Yoneda

Photo　Taizo Yamada

2018

浅井菜保子（1973　名古屋）版画家として、リトグラフ技法は瑞々しい表現が好ましく思っています。松江の荒神谷遺跡にある蓮は２千年前の種から発芽したもので、時を超えても花を咲かせる植物の生命力を画にしました。版に流動する線を描きインクを乗せ、紙に移し固定する作業は、今を確認する行為でもあります。

asanaho6789@gmail.com

神の池 2016
リトグラフインク, 紙, 60x45cm

伊藤昭一（1962　高槻）山陰で暮らしはじめて六年になります。おそらく潰えるまでここで暮らすことになるでしょう。どんなところか知りたいと撮影を始めました。「すみか」制作の動機です。この地では季節の度に生い茂る野草や雑草に強く惹かれました。それらはずっとここにいたのか、あるいはどこからかきたのか、そしてこれからどうなるのか。そんなことを考えながらレンズを向けました。作品から雑草たちのいる場所の空気が伝わればと思います。

8796cat@gmail.com

すみか 2018
インクジェットプリント20.3×25cm

栗原祐太（1989　出雲）様々なものがあふれて、折り重なっている建築物や都市の風景を描いています。特定の場所ではなく、記憶や写真を画面の中で構成しています。なにかが集まったものに興味があり、自分が欲しているものや流れを表現し、筆跡のひとつひとつは柱であったり、壁であったり、人であったり、乗り物であったりします。

yutakurihara7@gmail.com

Accumulation#4 2018
油彩, キャンバス, 45.5×53cm

小西郁江（1978　松江）23歳の時に絵を描き始めたのは、近代以降の抽象画に感銘を受けたのがきっかけでした。それ以来、約10年間、「抽象画」と格闘した末につくったのがこの作品です。一度グシャッと丸めて折れたり傷ついたりした紙に絵具を染み込ませ、意図から離れた形や色を得て、それを元に絵を作っています。この作品後から、人やものや風景を描くようになりました。その事を思うと、これは私と抽象画の、（ひとまずの）結論のようなものなのかもしれません。

ikue_ko@hotmail.com

Untitled Line 2013
水彩紙, 水彩絵具, 118x98cm

佐野行徳（1972　札幌）作品のテーマである「けしき」という言葉は、主に茶道の世界において、釉薬と焼成による頽れや窯変、斑文など、器表面の表情を指す「景色」に由来します。展示作品の主人公は制作過程で画面上に偶然現れる、無骨かつ繊細なマチエールです。酸化した金属などを想起させる画面は、茶碗の見所のように「景色」として存在し、それが観る人の記憶の中にある風景や心情、あるいは何かの情景を思い起こさせるきっかけとなればと思います。

sanogyoutoku@gold.megaegg.ne.jp

KESHIKI—17-05 2017
パネル, アクリル, 石膏, 9×9×3cm

高橋亜沙子（1986　松江）この作品は記憶や感情から見えてくる景色をモチーフにしている。記憶の中に漂う心地よく、温かい、さらには澄んでいる空気感を形として表現するため、具象的ではなく、抽象的な形態や色味を使い。また、身につけるという行為を通して、人間の内面にある記憶や感情にアプローチしている。　私はジュエリーという分野を通して、装飾性、身体との関係性から独自の芸術表現を探求している。

http://asako-takahashi.com

Landscape 2018銀, ステンレス
シルク, 石膏, 着色, 10×5×4cm

錦織秀行（1974　雲南）鉄を素材として、鍛金や鍛造という技法で制作しました。「葉」はヨーロッパを中心に生息するリシマキアという水草がモチーフになっています。「バナナフック」は植物の蔓が巻き付いたときにできる曲線をイメージしています。いずれも鉄に1200℃程度の熱を加え、ハンマーや鏨で叩いて加工しています。金属に熱を加えると伸び縮みする特性を生かした技法です。

nikkorichan@gmail.com

葉 2017
鉄, 8x12x0.05cm

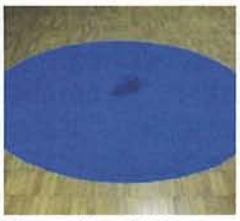
樋野広規（1976　札幌）紅葉した葉が大地に降り積もる頃、樹々は幹のみの造形をさらけ出します。これを逆光の下で撮影すると幹は黒く影絵の様になり、枝の細部までを鮮明に描き出します。
自然が創り出した造形に面白みを感じ、秋の終わり頃から樹々が芽吹く春先の間まで、凍える様な寒さに耐えながらも力強く天に向かって伸びゆく樹々の姿を探して、山野を巡り歩きました。

hhi.noveon12@gmail.com

Tree 2018
デジタル顔料プリント29.7×21×2

福井一尊（1976　津山）私は、「現在という存在」の曖昧さと確かさを鑑賞者と共有しうる美術表現の可能性について探究しています。今回は、村松邸において色彩と素材感と空気の混ざり合いが来場者にもたらす知覚にアプローチします。作者が作った「モノ」だけでなく、鑑賞者がイメージを広げる「コト」について考えます。

issonsan@yahoo.co.jp



blue pollen 2018
ミクストメディア, Ø150x20cm

宮岡俊夫（1984　出雲）僕の絵画は雑誌やインターネットから選び出した既成のイメージ（画像）がモチーフとなる。主に雑誌の中から"無名の風景"を選び、切り抜いたものをコラージュしたメモの紙を反転させて見ながら絵画を描いていく。最後にその紙はキャンバス裏側に貼られる。風景を反転させて描くのは私が普通ものを見る場合の認識を取り除き、できるだけ色と形のコンポジションや様々な筆触の痕跡として絵画を捉えたいためだ。

toshio.miyaoka@gmail.com

Landscape 2018
油彩, キャンバス, 90x131cm

安来明宏（1967　松江）新しい家に前の家の記憶を移植する。
家族の記憶、日本人の記憶、郷里の風、手に覚えた感触、、、たとえ私が外国に住もうとも、仮設の住宅に住もうとも、はるか遠く離れた火星に住もうとも、新しいパソコンに古いHDDのデータを移植するように私は記憶の再現をそこで行うであろう。今の私は自分の作品の中に自分の記憶を移植し、その作品の中に住んでいる。

http://yasugi.seesaa.net

Japanese Burger 2018
ミクストメディア, 10x10x10cm

米田由美子（1965　松江）米田の作品には集中力、繊細さ、緊張感が息づく。石膏、モデリングペーストなどを使って少しづつ作家の手で築かれていく有機的な豊かな量は成長するかのような生命力をたたえ、根源的な生命の始まりをイメージさせる。作品は柔らかな表情をたたえながら光の中で陰影と戯れる。純粋性を追求し内面の力を最大限に表現しようと試みられた作品は置かれた空間の中で静寂な時を佇むようだ。

http://www.yumikoyoneda.com

Floating 2018
ミクストメディア, Ø45x5cm